



株式会社公電テクノ

商品開発部 取締役
古内 衣枝氏
(代表取締役 古内 秀規 氏)

企業 D I A T I A
川口市元郷5-20-9
TEL:048-226-3601
営業時間:9:00~17:00
定休日:土・日・祝日



防災教材とひとつになった世界初の小さな袋 ポケットに入る「べんり袋」

今回は、電気設備工事業を営みながら、様々な商品を開発する株式会社公電テクノを紹介する。

23の特許を持つ

2004年に設立した同社の事業は、大きく2つに分かれる。電気工事業部は、主に官公庁発注の電気設備工事を施工している。設立以来、安全第一で一つ一つの仕事を丁寧に取り組む真摯な姿勢により、顧客からの信頼を着実に積み上げてきた。一方、商品開発部は、特許権・実用新案権等に関する商品の製造・販売を行っている。取締役を務める古内衣枝氏は一般社団法人婦人発明家協会に籍を置く「発明家」で、これまでに取得した特許は23件に及ぶ。衣枝氏が考案した商品には、災害関係のものが多い。このことは、これまで日本で起きたいくつかの大きな災害が影響している。

災害への意識と製品開発

1912年関東大震災 大正時代の大震災を経験した両親から、当時の凄惨な状況とともに、災害時の心がけや防災用品の準備を教えられて育った。また、生まれ育った東京の下町は道幅が狭く、消防車が通り抜けるのもままならないため、町内会で頻繁に消防訓練があった。衣枝氏の災害に対する意識は幼少のころから培われていった。

1995年阪神・淡路大震災 阪神地区を襲った大震災は、親族の命を奪っていった。この頃から、防災用品は身近に置くのではなく身に付けていられるものとの思いを抱き、ポケットサイズの「べんり袋」を開発するに至った。

2011年東日本大震災 「べんり袋」は、協会のコンクールで特賞を受賞した。東日本大震災はその受賞の10日後のことだった。支援のため被災地を訪れた際、あまりにも悲惨な状況に衝撃を受けた。生涯現役で防災の役に立ちたいと強く思い、「べんり袋」の製品化に取り組んだ。



「べんり袋」 支援を受け生産体制を確立

特許・ねじり剛性構造による「べんり袋」は、試行錯誤の末に考案した自信作だ。以前参加した消防訓練で、消防士から「ビニール袋は非常持ち出し袋の中に入れておくといいが、カドやシール部分から破裂するので過信しないように」と話があり、カドがなく水漏れしない袋を作り出したいと思い立ったことがきっかけだった。災害時に最低限欲しい機能である①酸素の確保、②水の確保、③汚物処理に役立つという3つの機能を備えている。しかし、いざ生産するにあたり大きな問題があった。「特許である『ねじり剛性構造』を作り出せる機械がなかったのです。メーカーに相談したところ、専用機を作るしかないとの答えでした。高額になりますが、防災の役に立ちたいという強い思いから導入を決意し、生産体制を確立しました」と衣枝氏は話す。導入には、商工会議所の支援により、ものづくり補助金の採択を受け活用した。

防災教育は子どもから

「べんり袋」は、特に子どもたちにこそ防災について意識してもらいたいと、NHK Eテレで放映中の人気教育アニメ「はなかつぱ」とタイアップしている。「本体と外袋にキャラクターを印刷して、子どもに親しみを持ってもらえるようにしました。また、『防災教育動画・稲むらの火』を15ヶ国語に翻訳し、外袋にQRコードを印刷しました。グッズと教本が一体となった世界初の防災商品です」と胸を張る。「はなかつぱの原作者であるあきやまただし先生が、べんり袋のために書き下ろしてくださった防災に関する4コママンガも綴じ込んでいます。防災の話は小さなお子さんと怖がってしまい切り出しにくいものですが、マンガをきっかけに親子で防災の話をしてもらえるのではと考えました」。小さな災害用袋に、衣枝氏のアイデアと思いが詰まっている。「バッグやランドセルに入るべんり袋と一緒に、「防災意識」もいつも携帯していただきたいと思います」と話す衣枝氏の、防災に対する情熱は高まるばかりだ。



*稲むらの火:原作は小泉八雲の短編小説「生き神様」。1854年に発生した安政南海地震の際、濱口梧陵の機知により稲むらに火を付けて誘導し、村民を津波から守ったという実話に基づく。